



気候変動と環境経営(4)

沈黙の春(レイチェル・カーソン)より
(2016. 5. 20 青樹築一訳 新潮社発行)

11 月②のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2025 年 11 月 11 日(火)

「鳥たちが鳴かなくなっていて生き物の出す音の無い春」は、「財務諸表本体とその注記事項の関係」に似ているのではないだろうか。財務諸表には多くの企業情報が含まれており、それを伝えてくれる財務諸表本体(春)。そして注記事項(鳥)は企業の重点方針の表明である。

個人的には知らない人たちが大部分だが、こういう人たちがいるということに、それほど勇気づけられたことだろうか。この世界を毒で意味なく汚すことに先頭をきって反対した人たちなのだ。人間だけの世界ではない。動物も植物も一緒に住んでいるのだ。その声は大きくなくても、戦いはいたるところで行われ、やがて勝利が彼らの上に輝くだろう。

アメリカの奥深く分け入ったところにある町があった。

生命のあるものはみな、自然と一つだった。町のまわりには、豊かな田畑が碁盤の目のように広がり、穀物畑の続くその先は土がもり上がり、斜面には果樹がしげっていた。春が来ると緑の野原のかなたに、白い花のかすみがたなびき、秋になればカシやカエデやカバが燃えるような紅葉のあやを織りなし、松の緑に映えて目に痛い。・・・ところが、ある時どういう呪いを受けたのか、暗い影が辺りに忍び寄った。今まで見たことも聞いたこともないことが起こりだした。若鶏はわけのわからぬ病気にかかり、牛も羊も病気になって死んだ。どこへ行っても死の影。・・・多かれ少なかれこれに似たことは合衆国でもほかの国でも起こっている。

地球が誕生してから過ぎ去った時の流れを見渡しても、生物が環境を変えるという逆の力は小さいものにすぎない。

だが、20 世紀という僅かな間に、人間という一族が恐るべき力を手に入れて、自然を変えようとしている。ただ自然の秩序をかき乱すのではない。今までにない新しい力―質の違う暴力で自然が破壊されてゆく。たとえば自然の汚染。空気、大地、河川、海洋、すべておそろしい、死そのものにつながる毒に汚れている。・・・私がむしろ言いたいのは、コントロールは、現実から遊離してはならない、ということ。そして、昆虫といっしょに私たちも滅んでしまうような、そんな愚かなことはやめよう―こう私は言いたいのだ。